

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

「羅須地人協会からの 撤退90年」を前にして

榎 昌子



去年、宮沢賢治生誕120年の年に畑仕事を始めた。畝幅が狭く、畝と畝の間も狭かったために土寄せが出来なかったり、防虫ネットをかけなかったので、白菜がレースの塊状になったりした。上手く出来たものもあれば、そうでないものもある中で、一番の収穫は、

羅須地人協会時代の宮沢賢治が身近に感じられるようになったことと、農業の問題が他人事ではなくなったことである。

我が家の畑に隣接して、道路に挟まれた田んぼがある。いや、田んぼのなれの果てと言うべきか。水田だったものが休耕田になり、やがて耕作放棄地になった。減反の補助金が出ていた間は、持ち主が年に一、二回草刈りをしていたのだが、廃止が決まってからは、それもしなくなった。生産調整がなくなることの不安が農家を覆っている。

若者は都会に出ていき、そのまま戻ってこない。戦前は、海を渡って大陸を目指す者もあった。昭和7年2月23日付「岩手日報」は、「花農卒業生満蒙へ／県出身の在満名士へ照会して／新天地開拓の野へ」という見出しで、花農の卒業生約五十名のうち、「満蒙に発展活躍せんとする希望者は十数名の多きに達した」と伝えている。

農村に希望を持ってない若者を、どう地元につなぎ止めておくか。もちろん当時とて手立てを講じなかったわけではない。

大正13年8月27日付「岩手日報」に、「農民学校の目的は／農村文化の開発／主として経営法を攻究し／自作農子弟を教育する／文部省当局の談」という見出しの記事が載っている。少し長いが以下に抜粋しよう。

「農村疲弊の原因は、農村の子弟が農村に親しまず、土地を売却しても都会に出でんとする傾向盛んなる事と、現在の農村に、農村自身の振興を計る可き人物払底に依るものであると思ふ。

従来の農業教育は、男女共単に技術方面の知識を授けるを以て第一の目的とした。農学校に人材の集中せざりし所以は、この辺にも存在してゐると思ふ。従つて農村の文化は漸次遅れ、今日の如く都会と農村の文化の懸隔を生ぜしめたのである。

農村を振興せしめんとするには、先づ第一に農村の文化を向上せしめ、都会文化と大差無きものに導く事が、農村の振興を計る所以であると信ずる。故に農民の学校を建設して農村開発に関する諸技術を教授する一方、一般の文化を向上せしむる学科を授けんとするものである。」

「農村疲弊」の分析が当を得たものかどうかはともかく、「文化」を農村振興の要諦に据えたところは新鮮に映る。けれども、言うは易く行ふは難し。宮沢賢治が農学校と羅須地人協会で、文化活動を展開しようとして挫折したのは周知のことである。周知のことではあるが、賢治の無念を思うと何度でも取り上げないわけにはいかない。

大正13年8月、賢治の戯曲四作品が、大勢の観衆の前で農学校の生徒たちによって演じられ、好評を博した。しかし、それと前後して、時の文部大臣が学校演劇に警告を発し、厳しく監督すべき旨の文部次官通牒が発せられた。全面禁止を求めたわけではなかったようだが、自粛せざるを得ない状況に陥ったのは確かである。

大正14年4月には、「陸軍現役将校学校配属令」が公布された。花巻農学校にも軍人が配属されたらしいことは、同年5月7日の日付けを持つ「三三三 遠足統率」下書稿に「中尉（下書稿（二）では少尉）」が出て来ることによって知られる。もはや学校で文学や演劇を主張できる時代ではなくなっていたのである。

次に賢治が夢見たのは農民劇団の結成だったが、これも実現することはなかった。治安維持法下で警察の事情聴取を受け、協会は活動停止を余儀なくされたからである。大陸での戦火が拡大すると、農村文化の向上も、農村振興を担う人材の育成も消し飛び、働き手は戦地に送られ、やがて、丹精した作物も「供出」を求められるようになっていく。

賢治は後年、「業の花びら」の題で知られた作品の下書稿欄外に、次のような一節を書き付けた。

「北上山地の一つの稜を砕きまっしろな石灰岩稜の億噸を得て／幾万年の脱滲から異常にあせたこの洪積の台地に与へつめくさの白いあかりもとし／はんや高萱の波をひらめかすと云つてもそれを実行に移したときに／ここの暗い経済は／恐らく微動も／しないだらう」「まっ青な稲沼の夜を強力の電燈とひまはりの花から照射させ鬼げしを燃し（二字分空白）をしても／それらが楽しくあるためにあまりに世界は歪んでゐる」。

賢治にこう記させた時代は、遠い過去のものになったのだろうか。もしかしたら、彼の挫折はそのまま、現代の私たちへの警告なのではないだろうか。来年2018年は、賢治が羅須地人協会から撤退して90年の節目の年に当たる。畑を耕しながら、彼の体験から引き継ぐべきことは何かをじっくり考えてみたい。

（作品の引用は『新校本宮沢賢治全集』から。新聞記事の表記については旧漢字を新漢字に改め、適宜句読点を施した。）

宮沢賢治は、なぜ白菜を栽培したのか？

舘 野 廣 幸



「ではみなさんは、次の三つの野菜のうち日本で最も古くから食べられているものは何か、ご承知ですか？」私は講演で学校の子供たちに問いかけました。三つの野菜とは「①白菜、②キャベツ、③レタス」です。ほとんどの子供たちは、①白菜に挙手します。しかし意外な答えがあるかもしれないと思い、②や③に挙手する子もいます。正解は③のレタスです。レタスが最も古くから栽培され、次にキャベツ、そして最も新しい野菜が白菜という順番にな

ります。意外な答えをした子が正解です。「白菜」は漢字ですし日本でもさぞや昔から栽培されていたものと思われがちです。キャベツやレタスはカタカナの外来語ですし原産地も地中海沿岸地域ですから、日本に入ったのは最近の野菜と思われがちです。しかし、キャベツは「甘藍（かんらん）」、レタスは「萵苣（ちしゃ・ちさ）」と呼ばれる漢字名があります。

レタスが栽培された記録があるのは、奈良時代以前からです。天平6年（734年）5月の『造仏所作物帳』（注1）に「苣（ちさ）」の文字がみられレタスのことです。レタスはキク科の野菜で、切ると乳白色の液がにじみ出るため、「乳草」から「ちさ」と言われます。地中海地方からシルクロードを経て、仏教の伝来と共に日本に入ったものと思われます。

キャベツの渡来は、宝永6年（1709年）の『大和本草』に「変種紅夷菜菔（おらんだな）」と記されていますが、江戸時代は観賞用が主で、結球性のキャベツの栽培は明治7年以降です。明治27年～35年に盛岡の鈴木米吉や工藤惣太郎が岩手に適した系統を選抜して、「南部甘藍」が産地として育成されました。

一方、白菜（結球白菜）の渡来の記録は、慶応2年（1866年）にありますが日本に定着していません。その後、明治8年（1875年）に東京の勸業博覧会に中国（清国）から三株の白菜（山東白菜）が出品され、これを愛知県の野崎徳四郎が栽培しますが普及するための種子が採れません。明治27年（1894年）の日清戦争で日本の兵士たちが清国の白菜「芝罘」（注2）を知り、その種子を持ち帰ります。これを基に宮城の沼倉吉兵衛や茨城の安資農夫などが白菜の栽培研究をはじめますが、なかなか成功しません。

なぜ白菜の日本での普及はこんなにも難しかったのでしょうか？そこには交雑という壁があったのです。白菜はアブラナ科の植物で、ナタネやカブ、つけ菜類と同じ仲間です。白菜もナタネも同じ黄色の花を同時期に咲かせ、これらは虫媒花なのでハチやアブなどの訪花昆虫で受粉します。ミツバチの行動半径は2 kmに達します。つまり、付近にアブラナ科の植物があれば、たちまち交雑して白菜ではなくなってしまうのです。

そこで宮城県の菅野鉦次郎と沼倉吉兵衛は、交雑を避けて白菜から安定した種子を得るために無

人島での採種を計画し、大正6年（1917年）から開始します。場所は松島の馬放（まはなし）島（注3）、種類は「芝罘」系統です。島内のアブラナ科野草をすべて除去し、ようやく良質の種子を得ることができたのは大正9年です。この白菜は「松島白菜」と命名され大正11年から宮城県内で栽培が開始、大正13年には「仙台白菜」の名で京浜市場を席卷するまでになります。さらに沼倉と共に研究していた渡辺穎二は渡辺採種場を設立し、大正14年には純系の品種「松島純一～三号」を育成します。大正期の仙台は白菜の最先端の地でもあったのです。

さて、この頃の宮沢賢治の作品には、白菜が何回も登場します。

「増水」 一九二六・八・一五・
島になって残った松の下の草地と
白菜ばたけをかこんでゐる

水はすでに
この秋のわが糧を奪ひたるか

「白菜畑」 (1926・10・9) (注4)
こんなつめたい空気のなかで
千の芝罘白菜は
はじけるまでの砲弾になり
包頭連の七百は
立派なパンの形になった

「盗まれた白菜の根へ」
一九二六・一〇・一三・
盗まれた白菜の根へ
一つに一つ萱穂を挿して
それが日本主義なのか

1926年（大正15年）は、賢治が羅須地人協会を立ち上げた年であり、その最初に作付された白菜は賢治にとって重要な野菜であったことが窺えます。この賢治の意気の入った白菜は、おそらく8月上旬に播種され発芽したばかりだと思いますが、北上川の洪水に遭い賢治は消沈してしまいます。ところが、白菜は災害を乗り越えて10月には立派に育っています。「白菜畑」では朝の冷氣の中で収穫の期待に膨らむ賢治の心境が描かれています。しかし、喜びも束の間その白菜が何者かに盗

まれてしまいます。自然災害を乗り越えた白菜であっただけに、この盗難という人災に怒りと悔しさを噛みしめて畑を見つめる賢治の姿があります。

賢治が育てた白菜の「芝罘」は、大正14年に渡辺採種場の育成した「松島純二号」と思われます。「包頭連」は「野崎白菜」かも知れません。「下の畑」は面積が二反四畝ですから、「芝罘」が1000株と「包頭連」が700株の作付ですと、合わせて一反弱ですから「下の畑」の3分の1は白菜で占められていたことになります。賢治が秋冬の野菜の主として白菜を作付していたことは明かですし、芝罘系と包頭連系の品種を比較栽培していたとも考えられます。

では、なぜ賢治は白菜の栽培に意欲的に取り組んだのでしょうか？その理由は三つ考えられます。第一には、新しいものの好きの賢治が大正時代の新野菜として登場した白菜に興味を持っていたこと。第二に白菜は寒さに強く貯蔵性もあり、冬の岩手に不足しがちな野菜を確保できること。そして第三は、明治後半に盛岡郊外から岩手県北で栽培されていた甘藍（キャベツ）が、すでに「南部かんらん」として産地化されていましたから、それに対する花巻近郊の農村の有望な産地形成野菜として白菜を考えていたのではないのでしょうか。実際に後の昭和10～15年にかけて岩手県の東北本線の沿線で「岩手はくさい」の産地が形成され、京浜市場で好評を博しています。

賢治のイーハトーブの農業に対する眼差しは、つねに未来を予知して農民の幸いのために向けられていたのだと思います。

注1 『造仏所作物帳』は天平五年（733年）の興福寺西金堂の造営と造仏に関する報告書で正倉院に納められていた。

注2 「芝罘」は中国山東省の地名で白菜の系統名にもなっている。

日清戦争の日清講和条約批准書が交わされた地でもある。

注3 松島白菜は馬放島や桂島で現在も採種されている。東日本大震災の津波で大きな被害を受けたが、地元宮城や岩手のボランティアの協力で復興した。

注4 『宮沢賢治年譜』堀尾青史編 筑摩書房による日付

参考文献

『日本の野菜 青葉高著作選Ⅰ』青葉高著 八坂書房 2000年

『白菜の伝来と定着の歴史』板倉聖宣著 仮説社 1994年

『岩手県農業史』森 嘉兵衛編 岩手県 1979年

宮沢賢治記念館の魅力と賢治 —賢治生誕120周年によせて—

太田 達久



昨年8月には「雨ニモマケズ展」が9月には「賢治の青春展」の2つの特別展が宮沢賢治生誕120周年を記念して開催されました。賢治ファンにとってはわくわくする企画展だったと思います。私自身賢治直筆の「雨ニモマケズ手帳」も、賢治が盛岡高等農林学校時代に学友と文芸同人誌「アザリア」全6巻（6巻全部を揃えて持っているのは賢治記念館だけ）も、宮沢賢治が保阪嘉内に宛てた書簡も見るのは初めてでした。賢治生誕120周年を記念してこの特別展が宮沢賢治記念館で企画されていることを知ってから絶対見逃してはならないと思い企画展が開催されることを一日千秋の思いで待ちわびていました。

初めてこれらの賢治に縁のある本物の展示物を目にしたとき何とも言えない胸が熱くなる思いをしました。ようやく本当の宮沢賢治に会えた。時空を超えて宮沢賢治との距離がぐんと近くなったように感じました。本物が訴える力といったらいいのか、魅力といったらいいのか、本当に一対一で宮沢賢治さんとようやく対面できたという万感の思いでした。多くの来館者がここに来て感激するように私もその一人になってしまいました。この館の運営方針の1つに「お帰りの時はより一層お元気な姿になって頂くこと」ということがあったように記憶しております。

まさしく宮沢賢治記念館通信に、その運営方針を裏づけるようなことがたくさん書かれています。ストレスによる失語症になり、声を出せなくなり、途方に暮れていたが、賢治記念館に来て展示を見ている内に自然と涙が出て癒やされ元気になり、笑顔になっている自分に気づいた人。毎日の多忙な生活に押し流され自分らしさを見失っていたが、賢治記念館に来て一息つき、人間らしさを取り戻せた人。亡き妻と十数年前にここを初めて訪れて以来この記念館に妻の温もりを感じ、自分が生きている限りは何度でも訪れたいと思っている人等。

どうしてお客様が元気になったりするのか自分

なりにその理由を考えてみると、賢治作品を読んで感動した人も賢治作品を読んでいない人も、この記念館を訪れ、記念館内の展示物を見ているうちに賢治作品や賢治の生き方、考え方に共感し、心が清められ豊かになる。そして記念館の周辺の景色のすばらしさが来館者の気持ちを更に潤す効果を生み出しているのではないかと思います。何度も記念館に来ているお客様が、来る度に新しい発見があり、何回でも来なくなる等、確かに宮沢賢治記念館にはお客様を元気にしたり、心を癒やす不思議な魅力があると思います。

東日本大震災が起きてからもう少しで6年目を迎えようとしています。非常事態でも礼儀正しいと世界から絶賛された日本人。いかなる困難な状況にあらうとも、相手の気持ちになって物事を考えられる日本人。絶望の中でも希望を前向きに語る日本人。日本人は誰かを救いたいとか助けたいという気持ちが特に強い人種ではないかと思いました。日本人のもっている美德を東北の人が今度の震災を通して示してくれたのではないかと思います。

あの震災のとき宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が大震災の惨禍に打ちひしがれている多くの人々へのメッセージとして国内にそして海外へと広がりを見せました。大きな悲しみを胸に秘め、目の前に起きた理不尽なこと不条理なことに負けないで、前向きに生きようとする被災者にかける言葉

が見つからず途方にくれていたとき、「雨ニモマケズ」が復興への「祈り」や「願い」として紹介されました。被災された方々の中には、この「詩」を心のよりどころにして生活した人々もありました。賢治はこの詩を世に出したいとか、皆に読んでもらいたいとは思っていませんでした。自分の人生の最後に残した心からの願いであり、思いであり、祈りでした。

宮沢賢治の弟清六氏の孫和樹氏は「雨ニモマケズ」の詩の中で大事なものは「行ッテ」という部分ですと言っています。この「行ッテ」の言葉と日本人の「利他」の行為が重なって詩が人々の心に強く訴えたように思います。

最後になります。詩人の谷川徹三氏は次のように言っています。「明治以後われわれは偉大な文学者たちをもちました。しかし、その人の前に、その人の後ろにほんとうにへりくだった心になってひざまづきたいという人をわたしは賢治以外にもたない。」又、高村光太郎氏は明治以降の詩人の中で誰が後世まで残るのでしょうかと聞かれたとき、宮沢賢治の名前をあげています。心の教育をするなら賢治作品を読ませよともいわれます。清六さんも宮沢賢治は100年続くと言っています。

これからの日本を背負う若い人に豊かな感性を養うためにぜひ賢治作品に触れて欲しいと思います。

読者の広場

私の宮沢賢治

賢治と弘前・山田野のこと

青森県弘前市 土岐 泰

〔新〕校本宮沢賢治全集によると、賢治は大正14年4月と6月の2度弘前を訪れ、前年11月末に花巻駅で見送った弘前歩兵第31連隊入営中の弟清六と面会しています。

また書簡でも弟を励まし、音信が途絶えた9月には病気ではないかと心配し、学校を休んで新設間もない五能線に乗り継ぎ山田野演習廠舎を訪れ、厳しい演習を終えた弟と営庭の芝生で将来の夢などを語り合いました。その感慨の様子は賢治

の書簡212と清六の「曠野の饗宴」（「四次元」100号）に記されています。

その後も書簡や仙台大演習後の面会を通して兄弟の絆が深まり、二人の進むべき道は次第に定まっていきました。そして、大正15年3月31日賢治は花巻農学校を依願退職。同日に除隊・帰省した弟に宮沢家を託し、4月1日独居自炊生活に入りました。

その5年後、清六は教育召集で3週間、愛弟子菊池信一は1年間弘前歩兵31連隊に入りました。当時の菊池への書簡の中に「～弘前はこちらで考へると暗いところのやう

な気もしますが案外陽気でせう。～弟が居たときは営舎と大石野とへ二度私も訪ねて行きました～」という一節があります。病が癒えつつあった賢治はこの時、実弟の弘前連隊入営からの様々なことや育まれた兄弟・師弟の固い絆をしみじみと感じ、これからの道を想い描いていたことでしょう。

賢治が訪ねた連隊の跡地は現在、学校敷地などになっていますが、そこに佇んでいると「憎むことのできない敵を殺さないで済むような世界に早くなりますように」の言葉が聞こえてくるような気がします。

熊本地震と宮沢賢治

熊本県熊本市 津留 清美

俄かにぐらぐらつと地震がはじまりました(「グスコブドリの伝記」)。昨年4月、熊本を大きな地震(M6.5)が襲った。28時間後さらに大きな地震(M7.3)が追い打ちをかけた。それが本震

だったという。信じられなかった。やがて1年を迎えようとしているが、まだまだ余震もあり落ち着かない日々が続いている。

阿蘇を源に流れる川が作る肥沃な平野に住む私たちはなぜか大きな地震はないと信じていた。倒壊した家、液状化のなかで歪んでしまった家、屋根や壁に損傷を受けた家屋はいまも少なくない。

便利さと経済成長を追求するなかで、賢治の「狼森と筑森、盗森」に「ここに家建ててもいいかあ」「すこし木貰ってもいいかあ」などと森にうかがいを立て、許しを乞うような自然や大地に向けた謙虚さや畏怖を忘れていた。

川に架かる橋を渡る前と後の継ぎ目で自動車はいまも小さく、あるいは大きくガタンと揺れる。その地震の忘れ形見である小さな裂け目や段差がまるで異界への入り口のよう。山猫がひげをひねっていたり、雪婆んごがひゅうひゅう冷たい雪を降らせていても、そういうこともあるに違いないと思える。賢治ワールドに自然の厳しさも、救いも希望も見いだす。

来館者の声

記帳ノートから

No. 354～358

リ ニューアル後の展示を楽しみに東京から来ました。賢治さんの伝えたかったことをより深く理解しました。賢治さんの大きな大きな宇宙全体をみる視座、改めて尊敬します。

数 多く多方面において宮沢賢治を知ることにより、人生がますます楽しく感じている70代のシニア女性です。まずは本を読み、何度読んでも感じることは各ちがいます。その時を生きている自分の感じ方だと思えますね。以前花巻に住んでいました。音楽

で好きな曲「星めぐりの歌」は癒される曲で大好きです。今までの花巻大好きです。これからの花巻も夢があって良いです。

中 学生のころに宮沢賢治の本を読破したつもりでしたが、まだまだ読み漏れている本の存在を知りました。忘れかけていた宮沢ワールド。一から読み直します。読破したらまた来ます。

学 校で「注文の多い料理店」の学習をしました。宮沢賢治さんのことについて知ることができてよかったです。

東 京世田谷成城からきました。一般の見学のように軽い気持ちで入りましたが、これは出直して、じっくり賢治先生の理想(今の私たちにも必要)以前からあこがれていた宮沢先生をもっともっと知り尊敬したいと思い、東京に帰ってからもう一度しっか

り勉強したしと決心しました。87歳女性。今までスキーで何度も安比に来ていましたが、次はここだけに来ます。

雨の日に記念館に来ました。5月なので緑は青々としていて、雨のせいで霧がかかり不思議な風景もみれました。農業という一つの分野を多方面からみる宮沢賢治の姿勢を見習いたいと思う。賢治の作品がなぜか「古いものなのに新しい」と感じる原点を知ることができました。

昨年学校で習った宮沢賢治さんについて、映像や資料、ポスターなどを通して、もっとくわしく知ることができました。私が、特によいと思ったのは、複製された賢治の手帳です。あの手帳に書かれていた「雨ニモマケズ」はみなさんもおぞんじのとおり、素晴らしい詩ですね。私も、宮沢賢治さんの、強くて折れない心を見習って行きたいです。

秋田からきました。国語の時間に「やまなし」の勉強をし、宮沢賢治さんの作品に興味をもちました。すてきな作品…！これからも読み続けていきたいと思います。

快晴、風がこちよく、ここからの絶景に友と二人で感動しております。何十年か前に2・3度訪れ昨年リニューアルということで寄らせていただきました。あらためて、宮沢賢治のお人柄、やさしさを感じ、ほっとしたいい気持ちになりました。多くの方が賢治の優しさにふれ、周りの人々に優しさを届けてあげたらどんなにすてきな世の中になるでしょう。

横浜から来ました。小学生のときに初めて宮沢賢治の作品を読んで物語の世界観に圧倒・感動されて以来、ずっと宮沢賢治の故郷であり、作品の舞台の原点となったこの地花巻に来てみたかったので、ようやくそ

の夢が叶いました。家に帰ったらまた読み返して、作品に酔いしれたいと思います。

小学校4年生の時、図書室で宮沢賢治の本を知ってから宮沢賢治に興味を持ち始めました。今まで、童話作家としての賢治しか知りませんでしたが、今回、農業に対する熱い思いを持った賢治を見ることができて、また考えが変わりました。家も家庭菜園をやると思っていた矢先なので参考にしたいと思います。

修学旅行できました。私の先生、そしてクラスの間みんなも宮沢賢治が大好きです。これからもたくさんの宮沢賢治の物語を読み人生をたどっていきます。(私の目標:全部の物語の制覇！)

念願の宮沢賢治記念館に来ることができ、宮沢賢治の童話の世界にこれからもふれたいと強く感じました。「雨ニモマケズ・・・」私もそんな人になりたい。そう感じた一日でした。

今日は晴れています。美しい展望です。盛岡での研修会の機会に、新花巻で下車して寄りました。思いがけない、念願がかないました。「雨ニモマケズ」の精神で、これからも人生を歩んでいきたいです。

祖母と、茨木から来ました。いまは亡き祖父が、初めて買ってくれた本が「銀河鉄道の夜」だったので、いろいろ思い出しながら見て回りました。帰ったら読み返したいな。賢治の世界に触れることができてよかったです。

わたしはフランス人です。フランスに日本の学校あります。この学校で宮沢さんのことをべんきょうしました。あと、星がだいすきでとてもいいべんきょうになりました。ありがとう。

今後の資料の保存と 公開について

現在、宮沢賢治記念館が抱えている課題の一つとして、所蔵している約3400枚の直筆稿を今後どのように管理していくかということがあげられます。

これらの資料は当館の石造りの収蔵庫で管理されておりますが、ほとんどが大正期から昭和初期にかけて執筆された原稿類、つまり紙類で、今後、何も処置をされなければ酸性劣化が進行し、やがて朽ちていくことが予想されます。

館としての役目は、これらの資料をただ収蔵しているだけではなく、昨年に修復を終え特別展で公開した同人誌『アザリア』と同じように、本格的な修復と保存方法を考え公開をしていくことだと思います。

ただし、公開を前提とした資料の修復、或いは現状を維持していくのに要する費用は決して安価なものではありません。また原稿の状況は、執筆年や筆記具、用紙の種類といった違いがあり施す処置はそれぞれ異なり、更に慎重性を伴う作業であることから長期的な計画が必要となります。

現在、当館ではこれら原稿類の調査にとりかかり、修復が必要なものには優先順位をつけ、今後の管理方法と公開について模索しているところです。計画的に修復等の処置が行われれば、今後の特別展等で公開することが可能となります。

来館者の皆様に多くの賢治の直筆稿を見ていただくことができるよう、取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(宮沢賢治記念館 学芸員)

今後の開催事業のお知らせ

宮沢賢治記念館特別展

童話「やまなし」展

童話「やまなし」は“小さな谷川の底”を舞台とした父蟹と子蟹の兄弟の視点が描かれた作品です。来年度修復予定の直筆草稿を公開するとともに作品の魅力に迫ります。

会期：4月29日(土)～8月27日(日)

8月下旬に記念講話を予定しております。

※直筆草稿の公開は

① 4月29日(土)～5月7日(日)

② 8月19日(土)～27日(日)

文芸同人誌「アザリア」100周年記念展

同人誌『アザリア』は大正6年～7年(1917～18年)に発行されたもので、平成29年(2017年)は創刊100周年の記念の年にあたります。

これに合わせ、当館のみが所蔵する同誌全6巻と、関係資料とされる童話「秋田街道」の直筆原稿の公開も行います。

会期：9月2日(土)～9月24日(日)

※直筆原稿の公開は

9月16日(土)～9月24日(日)

賢治と樹木－童話「虔十公園林」－展

宮沢賢治作品には、松、柳、杉、栗、はんのきなど、多くの樹木をみることができます。

「木を植える」ことをテーマとした童話「虔十公園林」を中心にとりあげ、残された自筆原稿(複製)などを通して、賢治における樹木の世界を展示します。

会期：10月1日(日)～平成30年3月31日(土)

※ 編集後記 ※

平成28年度は、宮沢賢治生誕120周年を記念して当館では「雨ニモマケズ」展、「賢治の青春」展「賢治と石」展、童話村のライトアップにあわせて「ナイトミュージアム」を開催し、県内外からたくさんの来館者をお迎えいたしました。

また、花巻市内の児童生徒を対象に「賢治の世界」セミナーを21校で開催し、賢治さんの作品や生き方に触れる機会を設け好評を頂いております。

平成29年度は賢治生誕121年を迎え、さらに多くの皆様のご来館をお待ちしております。